

特42

459

新
政
78

館書圖京東				
一 一 〇 冊	七 四 一 號	四 七 架	八 五 函	和書門 音樂類



頼政

諸國一見僧之新此程
都之入して洛陽乃寺社談

なぐたうきりては又是より南都

よしあつたやと思ふ作るあふ雲の

いあり乃社すあく程行末さ

深きや本幡乃開とと趣く依見

頁文

くさくさみし霞のささのゆく事なれ
てすほの国よきよきよきく
もも幸國よておほくしりるの里
のさの海への清きささの里橋の氣
ふかた可共ほらち可のあをれ美人
乃集りくう
何のささ信作す
是の里可始て

一たの者ありて金しららに世なま
か可舊法ありあは教へる可
よき佳くたつちまら路の里人お
まかから可た旧跡共ささの浪のうら
乃りよ舟と橋とささありて霞のさ
たるさる中よもささりるなるなる可舊
跡何とささ入申さす
また様よ

夏文

多野入た勸學院乃權るまゝ
と勢さしり人さ可て人さくまゝ
世ら正ふより社入老を撰法師信
まのまゝさるるくは程さくさ

はれり社大中乃事と清事あり
喜撰は解る唐の抄卷の都のしり
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

人さるるまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝ

山家 三十一 草子 三十二 様入 三十三 草田家 三十四
上 名 三十五 似 三十六 月 三十七 草 三十八 草 三十九 自 四十 草 四十一 草 四十二
冬 四十三 草 四十四 草 四十五 草 四十六 草 四十七 草 四十八 草 四十九 草 五十
小 五十一 草 五十二 草 五十三 草 五十四 草 五十五 草 五十六 草 五十七 草 五十八 草 五十九 草 六十
非 六十一 草 六十二 草 六十三 草 六十四 草 六十五 草 六十六 草 六十七 草 六十八 草 六十九 草 七十
名 七十一 草 七十二 草 七十三 草 七十四 草 七十五 草 七十六 草 七十七 草 七十八 草 七十九 草 八十
名 八十一 草 八十二 草 八十三 草 八十四 草 八十五 草 八十六 草 八十七 草 八十八 草 八十九 草 九十
名 九十一 草 九十二 草 九十三 草 九十四 草 九十五 草 九十六 草 九十七 草 九十八 草 九十九 草 一百

平水院と戸部寺の草子
草子 甲 草子 乙 草子 丙 草子 丁 草子 戊 草子 己 草子 庚 草子 辛 草子 壬 草子 癸
是社平水院と戸部寺の草子
草子 甲 草子 乙 草子 丙 草子 丁 草子 戊 草子 己 草子 庚 草子 辛 草子 壬 草子 癸
草子 甲 草子 乙 草子 丙 草子 丁 草子 戊 草子 己 草子 庚 草子 辛 草子 壬 草子 癸
草子 甲 草子 乙 草子 丙 草子 丁 草子 戊 草子 己 草子 庚 草子 辛 草子 壬 草子 癸
草子 甲 草子 乙 草子 丙 草子 丁 草子 戊 草子 己 草子 庚 草子 辛 草子 壬 草子 癸

中たるもよめて今^{ニテ}迄は往來
よけて物語の移る國を中たる
昔は河の宮軍のうら^ハ徳三位頼
政合戦は海員終るは^ハ扇と敷る^ハ志
果は日あはせり^ハ梅は古松あはせり
扇のありは^ハ物^ハく^ハ今^ハ扇の是を
中^ハ痛くも^ハは^ハ交^ハ成^ハなる^ハ

人あは^ハ跡^ハの^ハ草^ハ露^ハの^ハ音^ハの^ハあり
く^ハ行人^ハも^ハさ^ハり^ハさ^ハり^ハさ^ハり^ハ
く^ハう^ハも^ハ佐^ハ持^ハさ^ハり^ハさ^ハり^ハ
さ^ハり^ハも^ハ其^ハ宮^ハ軍^ハ乃^ハ目^ハも^ハ目^ハと^ハさ^ハり^ハ
當^ハり^ハも^ハ其^ハ宮^ハ軍^ハ乃^ハ目^ハも^ハ目^ハと^ハさ^ハり^ハ
さ^ハり^ハも^ハ其^ハ宮^ハ軍^ハ乃^ハ目^ハも^ハ目^ハと^ハさ^ハり^ハ
さ^ハり^ハも^ハ其^ハ宮^ハ軍^ハ乃^ハ目^ハも^ハ目^ハと^ハさ^ハり^ハ
さ^ハり^ハも^ハ其^ハ宮^ハ軍^ハ乃^ハ目^ハも^ハ目^ハと^ハさ^ハり^ハ
さ^ハり^ハも^ハ其^ハ宮^ハ軍^ハ乃^ハ目^ハも^ハ目^ハと^ハさ^ハり^ハ
さ^ハり^ハも^ハ其^ハ宮^ハ軍^ハ乃^ハ目^ハも^ハ目^ハと^ハさ^ハり^ハ

人乃ぢまの枕を寝の申さぬなむかひと
なむたぢらうの思ひ給ひしよ
上書の
夢乃浮世の中宮乃くさくさ
橋より年をくして若乃はせしう
渡も遠方人よお申哉頼政の思
おぬ乃ともあ人もあもきりく
早知
梅多頼政乃後矣かまよ顯き我

詞かたより
上美
思の人の浪花づくじも
心し流の扇の夢を敷て夢
夢後ニテ上うまたく
血の涙鹿
力けくゆきお及たくと流白奴
骨をくたかよと等名川の細竹の
浪あか淵深夢や伊勢武者の皆

火威のよりひきまへり信れあり
かきまへり信れあり
地
蝸牛丸角のありき
きるのありき
讀人
甲曹と書しは經よりありき
模因つる係三位し
其勢ありき

まへり信れあり
女名ありは
おはらりし
甲
平木院

乃庫の面 思ひあへり 佛在世
言 仏の教へ法の場はく。裏は平木大
まれば力は頼政の。公は母をえしる方
かはいの入り行はつていしては思はさ
源三位頼政の執事の後はは深く因果
の後ありしなりと 柘治兼光
夏のはいふあらばは謀殺ともありし公

もきの倉の言のいはせし井のよきよ有
明の月の影とあらむとくしては時
志をいふして路を三井寺につてたら
けしや去りて幸家の時にあらむなり
千石萬石の無と開の東に書りしと
まのや音羽のいはつつりし料の書きなり
本情の開といふはいふくしては思はさ

夏及

世のさむらうらうらうけ橋打慶の
大和路指て急まよ上テ寺とさう治と
の同まぐ用路のひまもあ其宮の
六度まで歩落馬して頗るうせ終る
まの其見しはれあち其藤あまらる人
あ其とて其平木院うして其留は其庭よ
ま其入つて其名橋入守の同其たれ

ま其さ其い其て其い其ち其の其ま其り其入其よ其た其ら其つ其其其其其よ其白其旗
と其な其ひ其つ其て其よ其す其る其歌其を其伝其名其を其
去程其は其海其平其れ其其其ら其つ其の其南其水其の其岸其

よ其抄其習其の其時其ら其昔其を其い其ま其ひ其の其音其は其よ
類其へ其て其あ其ひ其し其橋其の其ま其ま其し其と其隔
て其靴其を其み其つ其た其る其岡其井其の其淨其妙其一其頼其は
仰其歌其味其方其め其ら其と其其其ら其つ其て其平其家其れ

大坂橋のひらり水たたり
 舞可の大河あまの左右あは
 渡もくまもりありし殿よ
 田原は又大郎
 忠經より舞くはりし
 乃忠陣新
 ありしなるのなりし
 三百金時
 ころきもはりし水た
 たりもたたり
 うりしみる村島の
 翅はありし
 羽

大坂橋のひらり水たたり
 舞可の大河あまの左右あは
 渡もくまもりありし殿よ
 田原は又大郎
 忠經より舞くはりし
 乃忠陣新
 ありしなるのなりし
 三百金時
 ころきもはりし水た
 たりもたたり
 うりしみる村島の
 翅はありし
 羽

知よししてはなむらりの大町あはれ
一騎も流せぬ方乃者よためりてあり
是の御方乃者材ありて踏もたぬ
半町計きくはさるる御方乃者
掃くはなむらりの御方乃者
入乱れ物もくはなむらりの御方乃者
大の三の御方乃者

考武考れ
平等院乃庭の面
扇を亦敷よりひめ
乃所をてはなむらりの御方乃者

長門寺僧よかりたるは是
も徳生乃移の縁よ海扇乃
其の母の陰の婦のそとてうきよき
に立ぬるやうきよきなり

右之本者觀世太夫織部
章句真本令版行畢

正徳六丙申歲弥生

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二条通御幸町西江入町

山本長兵衛



明治十七年三月六日翻刻御届
同年四月十二日別製本御届

翻刻人

京都府平民

寺田熊次郎



下京區第五組麩屋町
錦小路五梅屋町十三番戶

